

樺太アイヌ口承テキスト「水汲みの話」の分析 —述語的論理が優先された事例—

大喜多 紀明

Analysis of Folklore Texts "*wahka taa tuytah*" in the Sakhalin Ainu Language: Cases of Predicate-Logic

Noriaki OHGITA

要旨：本稿において、樺太アイヌ民族である浅井タケを話者とする2編の口承テキスト（「水汲みの話①」および「水汲みの話②」）を分析したところ、当該テキストは交差対句により編成されていることがわかった。さらに、かかる交差対句の編成には、述語的論理が優先されることが確認できた。また、当該テキストの場合、こうした述語的論理がストーリーの編成に対しても影響を与えていることがわかった。併せて、本稿では、交差対句の要素対を分類するに際し、主語的対応、述語的対応、主語・述語的対応に基づく手法が有効であることを述べた。

キーワード：樺太アイヌ 口承テキスト 述語的対応 心性

1. はじめに

樺太アイヌを含む、アイヌ民族を話者（あるいは著者）とするテキストでは、交差対句構造がしばしば見いだされる。このことについては、以前の一連の報告で筆者は述べてきた（例えば、大喜多 2011 : 24-32、大喜多 2013a : 143-158）。本稿では、予備的検証として、浅井タケを話者とする樺太アイヌ口承文芸が収録された『浅井タケ昔話全集 I・II』¹に収録されている「水汲みの話 (*wahka taa tuytah*)」²と「砥石の男 (*ruy'aynu*)」³をテキストとし、交差対句法を適用する観点からの分析を行うことにより、かかるテキストにおいても交差対句が見いだせるかの確認を行う。そのうえで、この予備的検証によって得られた交差対句構造を踏まえ、かかる構造における要素の関係性を分析することとする。なお、本稿にお

¹村崎恭子（編集・翻訳）によるインターネット上の資料「浅井タケ昔話全集 1, 2」アジア・アフリカ言語文化研究所, http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html.

（2018年10月5日閲覧）。本稿ではこれを「全集」と呼ぶ。

²本稿ではこれを「水汲みの話①」と呼ぶ。

³本稿ではこれを「水汲みの話②」と呼ぶ。

る分析は、主語的論理を援用した主語的対応、および、述語的論理を援用した述語的対応を当てはめる観点に基づいて行う。

アイヌ民族が衣服、装飾具などに施すアイヌ文様には、しばしば対称性に富んだデザインがみられる（津田 2004：893-898、藪中 2009：1-9）。また、アイヌ口承文芸には対句などのシンメトリカルな形式が頻繁に見いだされる（丹菊 2018、佐藤 2004：171-185）。以上の知見は、アイヌ民族には対称性を好む心性があることを示唆している。アイヌ民族を話者あるいは著者とするテキストに交差対句が頻出する理由についても、デザインや対句表現の場合と同様、かかるアイヌ民族における対称性を好む心性に一因している可能性を筆者は述べた（大喜多 2013a：143-158）。以上より、アイヌ民族の心性を理解するうえでは、かかる交差対句に関する調査は有用であると言える。

アイヌ民族における交差対句の使用に地域的・歴史的な差異がみとめられるか、という点については、北海道アイヌのテキスト（例えば、大喜多 2011：24-32）と樺太アイヌのテキスト（大喜多 2014a：69-78）に、地域の違いに基づく差異がみとめられるか、江戸時代のテキスト（大喜多 2013b：18-23）と現代のテキスト（例えば、大喜多 2013c：104-126）に、時代の違いに基づく差異がみとめられるか、の検証が行われた。かかる検証によれば、当該テキストに関しては、交差対句構造が見いだされる点において、地域的・歴史的差異がみとめられないことが示された。しかし、これらの報告は、あくまでも、交差対句が見いだされる実例を紹介することが目的となっている。

また、交差対句を構成しようとする心性が、物語のストーリーの編成にいかなる影響を与えるか、という点については、大喜多（2013d）では、上田トシを話者とする北海道アイヌの口承テキスト「カラスに育てられた男の物語」を、大喜多（2014b）では、浅井タケを話者とする樺太アイヌの口承テキスト、「ポヌンカヨ-86 (*ponunkayoh-86*)」および「ポヌンカヨ-88 (*ponunkayoh-88*)」⁴を題材に、それぞれのテキストに対する、ストーリー展開と交差対句の対比に基づく検証を行った。それによれば、ストーリー展開と交差対句の構成が互いに独立していることを示す知見が示された。一方、かかる検証が行われた先行研究は上述の2例に過ぎず、全般的な特徴を論じるにはさらなる事例の検証が必要であると言える⁵。

そもそも、交差対句が構築されるためには、複数の要素対⁶が存在しなければならない。かかる要素対の特徴については、例えば大喜多（2012a）や大喜多（2012b）では、①「類似」した要素による対応、②「正反対」の要素による対応、③物理的変化どうしによる対応、④物理的変化の前後による対応のような対応の種類⁷があることが述べられた。しかし、ここでの対応の種類に関する言及は、あくまでも、口承テキストが交差対句形式により構成されてい

4 「ポヌンカヨ - 86 (*ponunkayoh-86*)」および「ポヌンカヨ - 88 (*ponunkayoh-88*)」は全集に収録されている。

5 この点は別の機会に調査するつもりである。

6 本稿では、交差対句を構成する要素の対のことを「要素対」と呼ぶ。

7 本稿では、①「類似」した要素による対応、②「正反対」の要素による対応、③物理的変化どうしによる対応、④物理的変化の前後による対応で示されるような、交差対句を構成する要素の関係性のことを「対応の種類」と呼ぶこととする。

ることを説明する際に、各要素対における要素どうしがどのような関連性をもっているかを便宜的に示したものであり、かつ、かかる分析法には恣意が介入する余地があると言える（大喜多 2012a: 181-213）。換言すれば、交差対句の特徴や、要素対を構成する心性を理解するためには、要素対の関連性に関する体系的な分析と整理が必要であると言える。

本稿は、かかる要素対の分析と整理を行ううえでの手法を提供する試論として位置づけられる。本稿では、かかる分析を、主語的対応および述語的対応の観点から行うこととする。併せて、かかる主語的対応と述語的対応に基づく分析により、テキストの話者がいかなる心性を持ち合わせているか、に関する考察を行いたい。さらに、かかる視座による分析手法がはたして有効であるか、の考察も行うこととする。

2. 交差対句

例えば、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$ のように、句節で構成される要素の対が同心円状に配列した構造（久野 2005: 71-83）は「キアスムス」、「交錯配列」などと呼ばれるのであるが、本稿では、便宜上、「交差対句」と呼ぶこととする。

以下、アイヌ口承テキストにみとめられる交差対句の事例として、大喜多（2012a）に掲載されたテキスト「老いたカラス」および2種類の交差対句を示す。

「老いたカラス」

- 1 年寄鳥はどうした？
- 2 麴を取りに行った。
- 3 其の麴は何うした？
- 4 酒を造ってしまった。
- 5 其の酒は何うした？
- 6 飲んでしまった
- 7 飲んだのは何うした？
- 8 糞に出してしまった。
- 9 其の糞は何うした？
- 10 犬が食ってしまった。
- 11 其の犬は何うした？
- 12 殺してしまった。
- 13 殺したのを何うした？
- 14 からすが食ってしまった。
- 15 其のからすは何うした？
- 16 殺してしまった
- 17 殺したのは何うした？
- 18 矢に作ってしまった。(羽で)
- 19 其の矢は何うした？

- 20 (それで) 樹を射ってしまった。
 21 其の木は何うした？
 22 茹ってしまった。
 23 きったのを何うした？
 24 火にくべてしまった。
 25 火にくべたのは？
 26 おきになってしまった
 27 其のおきは何うした？
 28 白い灰 (おきの上に見える白いの)
 29 其の白い灰は何うした？
 30 あくになってしまった。
 31 其の灰は何うした？
 32 炉中を片付けて、捨てて
 33 しまった。
 34 捨てたのは何うした？
 35 苔になってしまった。
 36 其の苔は何うした？
 37 舟につくってしまった。
 38 其の舟は何うした？
 39 見える所と見えない所との
 40 間へ流れてしまった!!!

【交差対句「老いたカラス」①】⁸

- A 麴→酒→糞 (質的な変化) (1～8)
 B 犬を殺した (9～12)
 B´ カラスを殺した (13～16)
 A´ 木→火→灰 (質的な変化) (21～33)

【交差対句「老いたカラス」②】

- C カラスを殺してしまった (質的・空間的变化) (15・16)
 D 羽で矢を作る (加工) (質的变化) (21・22)
 E 薪を作る 薪が熾 (おき) になる (質的变化) (変化前) (23～26)
 F 白い灰 (28～30)
 F´ 灰 (31～33)
 E´ 灰を棄てる 灰が苔になる (質的变化) (変化後) (34・35)

⁸大喜多 (2012a) では言及していないが、B と B´ は、<生きた状態>から<死んだ状態>へ移行する「状態変化」であると言える。

| | | |
|----------------|------------|---------|
| D´ 苔で舟を作る (加工) | (質的变化) | (36・37) |
| C´ 舟が流れてしまった | (質的・空間的变化) | (38～40) |

大喜多 (2012a) では、テキスト「老いたカラス」にみとめられる交差対句として、交差対句「老いたカラス」①および交差対句「老いたカラス」②で示される2種類の交差対句が示された。大喜多 (2012a) で紹介されたもの以外でも、アイヌ民族を話者あるいは筆者とするテキストに交差対句がみとめられる事例がある。

3. 主語的対応と述語的対応

本稿では、要素対の構成の在り方を検証する際、主語的論理と述語的論理の概念を援用することとする。村林 (2005) は中村 (1989) を引用しつつ次のように述べた。

中村 (1989) によると、述語的論理とは述語の同一性に基づいた論理である。それはたとえば「私は処女です。聖母マリアは処女です。ゆえに私は聖母マリアです」といった形で表される。正規の三段論法、たとえば「すべての処女は聖母マリアを憧れる。彼女は処女である。彼女は聖母マリアを憧れる」という推論は、大前提の主語 (=「すべての処女」) のうちに小前提の主語 (=「彼女」) が包摂される、すなわち主語の同一に基づいた主語的論理であるが、それに対して述語的論理は、大前提の述語 (=処女) と小前提の述語 (=処女) の同一性に基づいて結論が引き出される。つまり、この述語的論理においては、共通の述語あるいは要素をもっていれば A と非 A (=B) が同じものとされ、それゆえ事物が、たとえば統合失調症患者の絵にしばしば見られるような、半分が男で半分が女である A と B の折衷像として見られることも生じるのである。

つまり、村林 (2005) によれば、主語的論理とは主語の同一性に基づいた論理であり、述語的論理とは、述語の同一性に基づいた論理のことである。

本稿では村林 (2005) の主語的論理および述語的論理の概念を援用し、主語的論理が優先されることにより要素対が構築された対応を「主語的対応」と呼び、述語的論理が優先されることにより要素対が構築された対応を「述語的対応」と呼ぶことにする。

4. テキスト

本稿では、「全集」に収録された「水汲みの話①」および「水汲みの話②」の、村崎による日本語訳をテキストとする。水汲みの話①と水汲みの話②は浅井⁹を話者とする同話¹⁰なの

⁹「全集」によれば、浅井タケ (1902-1994) は、アイヌ語樺太西海岸方言を話す「完璧な話者」であった。

¹⁰口承文芸の場合、たとえ、同一人物による同一の話であったとしても、別の機会に話された物語が次にも完全に再現される訳ではない。「水汲みの話①」と「水汲みの話②」も同一人物による、基本的には同一の話であると言える。

であるが、採録時期が異なっており¹¹、内容にも異なる箇所がある。以下、水汲みの話①および水汲みの話②を引用転記する。なお、引用文中の[記号]および下線は筆者によるものである。

4.1. 水汲みの話①

本節では、水汲みの話①を記す。

◆水汲みの話①

[A/]昔など私たち小さいとき、水を汲めば、昔話聞かせてやるからって、ババたちそう言うから、水汲みの昔話たくさんあるんだ。それで、ある村に、そこは人もいないところだったが、脂カス男、それから土男、草男、それからスネ細男、それからセムシ男ってこの、背中のところ高い人。(rannka'orii? M) この背中のところ高い人を rannka'orii っていうの。それからこのスネ、ここのところ細い人でね、スネ細男がいたとき。[A] [B/]スネ男がいて、その外に出て、草むらを分け入っていったとき。[B] [C/]入って行ってしばらくすると、そこでマメを一粒取ったとき。[C] [D/]マメを一粒取って、それからこんど水がなくなったので、水を汲んでくれ言い合ったとき。「お前水を汲め、お前水を汲め」って、こうやって言った。[D]

[E/]そう言ってから、セムシ男じゃない、あのう、脂カス男が水汲みに出たとき。脂カス男が水汲みに出ていなくなったとき。待っても待っても帰ってこなかった。脂カス男が出て、いや、草男よ、草男が出て行って待っても帰って来ないからそれから脂カス男が出たのをイヌが食べたとき。

脂カス男 (nakapuru aynu) っていうのは、nakapuru っていうのはアザラシの脂をとったかすを nakapuru と言うんだ。

その脂カス男が出たとき。脂カス男が出たのをイヌが食べたんだと。

それからまた待っても帰って来ないから様子を見に行ったら、脂カス男はイヌが食べていた。[E] [F/]それから草男に水を汲みに行かせようとしてそこからのぼって、川の方を見ているうちに風が吹いて、風に吹きとばされてしまったんだと。死んでしまったとき。

[F]

[G/]それで死んで、それから土男が水汲みに出たのだが土男が出たら、川に下りて水汲みをしたら水の中におちて、水の中に落ちて死んだとき。[G]

[G´/]あのうそれからスネ細男が出て、その土男の手を引っぱったらスネ細男はスネを折って水に入って死んでしまったとき。[G´]

それから今、セムシ男とスネ細男といて、それから砥石男が今度いたとき。

[F´/]草男は川に風が吹いて川に入って死んだ。[F´]

[E´/]それから脂カス男は外に出てイヌが食べたとき。[E´]それから土男は水に入っておぼれたとき。

¹¹「全集」によれば、水汲みの話①は 1987 年 5 月 5 日に、水汲みの話②は 1987 年 8 月 7 日に採録された。

[D´] 今度、スネ細男とセムシ男と砥石男だけがいたとき、今。[D´]

[C´] それからスネ細男が出て何かにつつかって、ころんでスネを折ったとき。スネを折ってそれで死んだとき。[C´]

[B´] そうしてから今、砥石男とセムシ男だけが残ってそれから外に出て、走ったりとんだり走ったりしている中にセムシ男は背中が裂けたとき。

(裂けたの?M) 「うん、裂けたそう、背が高いから」(どこが裂けたの? 背中?M) 「うん、背中が。」

それで、もうだれもいないんだ。[B´]

[A´] あとは砥石男だけが一人で外に出てはねたり、走ったりしてそうやって暮らしていたとき。これで終わり。[A´]

4.2. 水汲みの話②

本節では、水汲みの話②を記す。

◆水汲みの話②

[H] サンヌピシ村にホロケウポがいて、そのそばに男たちが住んでいたとき。[H] [I] 土男、スネ細男、セムシ男だった。[I] [J] それから土男が外に出て、草むらをかき分けながら歩いて行った。

草をかき分けながら行くと、マメがたくさんあってそれを拾ったとき。[J] [K] 拾ってから昼食のために水を汲みに、土男が水汲みに下りていったとき。

土男が水汲みに下りて、土男が水汲みに下りていってから、土男が水を汲んで戻ってくるのを待っても待っても来なかったから、それからスネ細男が様子を見に行ったら、土男は水の中に落ちて溺れていた。死んでしまった。[K] [K´] それから土男の手を引っぱったとき、スネ細男はスネを折って水の中に落ちて死んだ。[K´]

[J´] それから草男が、家の屋根の上に登って川の方を見ていたら、風が吹いて飛ばされて川の中に落ちて死んだ。

それから脂男が外に出て、脂男が外に出たところが、イヌに食われてしまった。[J´]

[I´] それから今度セムシ男と砥石男と一緒にいたのだが、外に出て、逆さまに、高いところから滑って転んで、こうしているうちにセムシ男は背骨が折れて死んでしまった。

[I´]

[H´] それで、砥石男だけが生き残って一人で暮らしたとき。こういう昔話だ。[H´]

5. 予備的検証

従来より、アイヌ口承テキストにはしばしば交差対句がみとめられてきた。本節では、予備的検証として、4節で示した水汲みの話①および水汲みの話②における記号に基づいて図式化を行うことにより、それぞれのテキストに交差対句が見いだせるかを確認する。

5.1. 水汲みの話①の構造

本節では、まず、4.1. 節における水汲みの話①に付した記号に基づいた図式を次に示す。なお、便宜上、本稿では、脂カス男を脂男、スネ細男を細男、セムシ男をセ男、砥石男を砥

男と呼ぶこととする。

- A 脂男・土男・草男・細男・セ男が暮らしている
- B 細男が草むらに分け入る
- C 細男がマメを拾う
- D 男たちが水を汲んでくれと言い合う
- E 脂男が犬に喰われて死ぬ
- F 草男が風に飛ばされて死ぬ
- G 土男が川に落ちて死ぬ
- G´ 細男が土男を引っ張ったことでスネが折れ川に落ちて死ぬ
- F´ 草男が川に入って死ぬ
- E´ 脂男が犬に喰われて死ぬ
- D´ 細男・セ男・砥男がいる
- C´ 細男が何かにつかって転びスネを折る
- B´ セ男の背中が裂ける
- A´ 砥男が暮らす

AとA´には、「男たち」あるいは「男」の暮らしの様子が描かれている。この物語の登場人物は脂男・土男・草男・細男・セ男・砥男であるのだが、Aでは砥男以外の全ての男が住んでいるのに対し、A´では、砥男だけが暮らしている。

| 要素 | 人物 | 状態 |
|----|----------------|--------|
| A | 脂男・土男・草男・細男・セ男 | 暮らしている |
| A´ | 砥男 | 暮らしている |

Bには、細男が草むらに分け入る様子が描かれている。一方のB´には、セ男の背中が裂ける様子が描かれている。一見すると、この両者は無関係に見えるのだが、なにかしらの「場所」に外力が加わることにより割れるという点で共通している。

| 要素 | 人物 | 場所 | 状態 |
|----|----|-------|------|
| B | 細男 | 草むら | 分け入る |
| B´ | セ男 | セ男の背中 | 裂ける |

CとC´には、共に、細男の様子が描かれている。Cでは、細男はマメを拾い、C´では、細男は転んでスネを折る。ここで、マメを拾うためには体を屈める必要がある。一方、C´では、細男は転ぶことにより結果的に体を屈めることとなる。つまり、Cの場合は、細男には身体の屈曲を自らの意志により行い、かつ、マメという報酬を獲得したのであるが、C´

では、細男は身体を屈曲させたのであるが、そこには自らの意志を伴っておらず、かつ、スネを折るという負の報酬（被害）を被ることとなった。

| 要素 | 人物 | 状態 | 意志 | 報酬 |
|----|----|--------|----|-------|
| C | 細男 | 身体を屈める | あり | マメを獲得 |
| C´ | 細男 | 転ぶ | なし | スネを折る |

D と D´ は、物語が次の場面に移行するにあたり、一旦、男たちが集まる場面である。D には、水汲みを誰がするかということについて男たちが互いに言い合っている。ただしここで集まった男たちの名前は記されていない。一方、D´ は、砥男を加えた物語を開始するうえでの男たちの紹介であり、その時にいた男たちの名前が列挙されている。つまり、この D と D´ は、複数の男を紹介することにより、物語を次の場面へと移行させる機能を持つと言える。

| 要素 | 人物 | 状態 | 要素の機能 |
|----|----------|--------|---------------|
| D | 名前なし | 集まっている | 物語を次の場面に移行させる |
| D´ | 細男・セ男・砥男 | 集まっている | 物語を次の場面に移行させる |

E と E´ には、共に、脂男が犬に喰われて死ぬ場面が描かれている。この E と E´ はおそらく同一の出来事について述べたものであると思われる。つまり、E´ の記事は、話者である浅井が、時系列とは関わりなく当該箇所に入挿した重複部分であると言える。

| 要素 | 人物 | 状態 |
|----|----|----------|
| E | 脂男 | 犬に喰われて死ぬ |
| E´ | 脂男 | 犬に喰われて死ぬ |

F と F´ においても、両方の箇所に草男が死ぬ場面が記されている。F では、草男が川の方角を見ているときに風に飛ばされて死んだと書かれているのに対し、F´ では、F と同様、草男が風に飛ばされたことが書かれているが、それに加えて、風に飛ばされた結果、川に入って死んだことが書かれている。つまり、双方の記載を合わせると、草男は川の方角を見ているうちに風に飛ばされ、川に入って死んだと解釈でき、双方における草男の死の態様には矛盾があるとは言えない。以上より、F´ は F の再掲記事であり、E´ と同様、時系列とは関係ない重複箇所であると言える。

| 要素 | 人物 | 状態 |
|----|----|--------------|
| F | 草男 | 風に飛ばされて死ぬ |
| F´ | 草男 | 風に飛ばされ川に入り死ぬ |

G には、川に落ちた土男の死が書かれている。一方、G´には、川に落ちた土男を助けるために訪れた細男の死が書かれている。つまり、G では細男は登場せず、土男の死のみが描かれているのだが、G´では G と同じ場面が再び描かれるものの、土男が川に落ちる様子は描かれず、土男を助けるために死んだ細男に注目した記載となっている。換言すれば、G と G´は同じ場面だが、G は土男の死に対して、G´は細男の死に対して注目した描写であると言える。

| 要素 | 人物 | 状態 |
|----|----|--------------|
| G | 土男 | 川に落ちて死ぬ |
| G´ | 細男 | 土男を助けようとして死ぬ |

以上より、A と A´、B と B´、C と C´、D と D´、E と E´、F と F´、G と G´はそれぞれ対応関係にあり、かつ、各要素が A→B→C→D→E→F→G→G´→F´→E´→D´→C´→B´→A´という順序で配列しているため、各要素対は同心円状に配列している。したがって、水汲みの話①は、合計 7 対の要素対を持つ交差対句で構成されている。なお、下線部分は、交差対句とは関わりない箇所である¹²。

5.2. 水汲みの話②

4.2. 節で示した水汲みの話②における記号に基づく図式を次に示す。なお、水汲みの話②で登場する「脂男」のアイヌ語表記は、「nakapuru'aynu」であり、これは、水汲み話①の「脂カス男」のアイヌ語表記「nakapuru'aynu」と同一である。つまり、「脂カス男」と「脂男」は、アイヌ語を日本語に翻訳した際の表現上の揺れである。したがって、「脂男」も、「脂カス男」と同様、脂男と呼ぶこととする。

H 男たちが暮らす

I 土男・細男・セ男の紹介

J 土男が草むらをかき分ける→マメを拾う

K 細男が土男を探す→土男の死

K´ 細男が土男を引っ張る→細男の死

¹²下線箇所には、土男が水に入っておぼれることが書かれている。つまり、「土男」が主語であり、「おぼれる」が述語である。それに対し、G では、「土男」が主語であり、「死んだ」が述語である。下線箇所と G の双方を比較すると、主語は一致しており、述語の「おぼれる」に「死んだ」が含意されるとすれば、述語も一致していると言える。したがって、下線箇所と G には対応関係が成立していると言える。しかし、この対応関係は、「水汲みの話①」における A→B→C→D→E→F→G→G´→F´→E´→D´→C´→B´→A´という順序の配列には組み込まれていない。そこで、本稿では、当該箇所を交差対句とは関わりない箇所として位置づけた。ただし、このことは、本稿で提示した以外の交差対句が「水汲みの話①」に見いだされる可能性や、当該対応関係がかかる新たな交差対句の構成要素となる可能性を排除することを意味していない。

J´ 草男が飛ばされて死ぬ→脂男が犬に喰われる
I´ セ男と砥男がいたがセ男が死ぬ
H´ 砥男が一人で暮らす

H では男たちがサンヌピシ村のホロケウポの近くに暮らしていることが述べられている。ここでのサンヌピシ村は、樺太アイヌの口承にしばしば登場する架空の村であり、ホロケウポも同様に架空の人物である。ホロケウポの近くに暮らす男たちの名前は H には書かれていないものの、直後の I によれば、男たちは土男・細男・セ男である。一方、H´ では、砥男が一人で暮らしていることが述べられている。双方は、男たちあるいは男が暮らしていることが書かれている点で共通している。

| 要素 | 人物 | 状態 |
|----|----------|--------|
| H | 土男・細男・セ男 | 暮らしている |
| H´ | 砥男 | 暮らしている |

I は、土男・細男・セ男についての紹介である。なお、H には、一緒に暮らす男たちが誰であるかの記述がない。一方、I´ には、セ男と砥男と一緒に暮らしているのだが、セ男が死ぬことが述べられている。なお、セ男が登場する箇所は、水汲みの話②では I と I´ のみである。ここで、セ男に注目し、I と I´ を評価すると、I ではセ男が他者と暮らしているが、I´ では、セ男の死により、他者との暮らしが解消されるており、双方は暮らしの在り方がテーマである¹³。

| 要素 | 人物 | 状態 |
|----|----|----------------------|
| I | セ男 | 他者と暮らしている |
| I´ | セ男 | セ男の死により他者との暮らしが解消される |

J では、まず、土男が草むらをかき分ける様子が書かれている。続いて、土男がマメを拾う様子が書かれている。この拾われたマメは、男たちの昼食のためのものである。それに対する J´ では、まず、草男が風で吹き飛ばされる様子が書かれている。続いて、脂男を犬が喰う場面が書かれている。双方は、まず、何かしらの外力が草あるいは草男¹⁴に対して働くことにより、草かき分けられるか草男が飛ばされるかの記事が書かれている。つまり、いずれも「草」¹⁵が外力を受けている。続いて食事に関連するテーマとなるのだが、J では男たち

¹³セ男は I および I´ のみに登場するので、本稿では、セ男に注目したうえで、I と I´ の対応関係の評価した。なお、I の主語を「土男・細男・セ男」とし、I´ の主語を「セ男と砥男」としたうえで、I・I´ 双方の述語を「暮らしている」とすることもできる。

¹⁴本稿では草男を草の擬人化とみなす。

¹⁵草が擬人化された草男を含む。

の食事を獲得するが、J´では逆に男¹⁶が犬の食事になっている。

| 要素 | 人物① | 状態① | 人物② | 状態② |
|----|-----|---------|-----|-------------|
| J | 土男 | 草をかき分ける | 土男 | マメ（昼食）を獲得する |
| J´ | 草男 | 風に飛ばされる | 脂男 | 犬に喰われる |

続いてKとK´である。Kでは、細男が土男を探している。一方、K´では、細男が土男を引っ張ることにより助けている。双方は、いずれも、細男が土男を救出する様子である。また、KとK´には、共に、男の死が描かれているものの、Kでは土男の死であるのに対し、K´では細男の死が描かれている。

| 要素 | 人物① | 状態① | 人物② | 状態② |
|----|-----|---------|-----|---------------|
| K | 細男 | 土男を探す | 土男 | 川に落ちて死ぬ |
| K´ | 細男 | 土男を引っ張る | 細男 | スネを折って川に落ちて死ぬ |

上述のようにHとH´、IとI´、JとJ´、KとK´はそれぞれ対応関係にある。かつ、各要素は、H→I→J→K→K´→J´→I´→H´と配列している。したがって、各要素対は同心円状に配列しているので、水汲みの話②は、合計4対の要素対による交差対句構造である。

6. 主語的対応と述語的対応の観点による分析

5節では、予備的検証として、水汲みの話①および水汲みの話②の構造の分析を行ったところ、水汲みの話①は7対（A・A´、B・B´、C・C´、D・D´、E・E´、F・F´、G・G´）、水汲みの話②は4対（H・H´、I・I´、J・J´、K・K´）の要素対を持つ交差対句からなることが確認できた。

本節では、5節で得られた一連の要素対を前提に、これらに対し、主語的・述語的概念からの再検証を行うこととする。その際、まず、主語的概念については、各要素の主語的部分の抽出を、また、述語的概念については各要素の述語的部分の抽出を行う。そのうえで、各要素対が主語的な因子の共通性に基づく対応（つまり主語的対応）を構築しているか、述語的な因子の共通性に基づく対応（つまり述語的対応）を構築しているか、主語的・述語的双方の因子の共通性に基づく対応（つまり、主語的対応と述語的対応の双方であり、これを「主語・述語的対応」と呼ぶ）を構築しているかの判別を行うこととする。

まず、要素対A・A´の場合である。5.1.節で示したように、Aにおいて、「人物」は「脂男・土男・草男・細男・セ男」であり、「状態」は「暮らしている」である。対し、A´においては「人物」は「砥男」であり、「状態」は「暮らしている」である。ここで、各要素を構成する「人物」は、「主語的」と「述語的」の概念の内の「主語的」に相当すると言える。ま

¹⁶この場合は脂男である。

た、「状態」は、「述語的」に相当すると言える¹⁷。以上の前提に基づけば、A と A' は主語的な観点においては一致していない¹⁸が、述語的な観点では共通しており、したがって、要素対 A・A' は述語的対応である。

以下、上述の要素対 A・A' の分析と同様の手法により、要素対 B・B' ~K・K' についても分析を行う。

要素対 B・B' の場合、B の「人物」は「細男」であり、「状態」は「分け入る」であるのに対し、B' の「人物」は「セ男」であり、「状態」は「裂ける」である。ここで、「人物」の「細男」と「セ男」は一致しておらず、対応関係にはない。「状態」については、「分け入る」と「裂ける」は、双方とも、亀裂がない状態から亀裂がある状態へと移行する様子であると言え、この点は共通している。以上より、B・B' は、述語的な因子が共通することにより要素対が形成されているので述語的対応である。

要素対 C・C' についてである。ここでの「人物」は「細男」で共通している。また、「状態」は C 「身体を屈める」と C' 「転ぶ」である。なお、ここでの「転ぶ」は、単に何かに躓いて倒れる動作ではなく、スネが折れることにより身体が屈曲する動作であると推測できる。かかる推測に基づけば、双方は類似している。以上より、C・C' は、主語的・述語的双方の因子が共通することにより要素対がつけられているので主語・述語的対応である。

続いて要素対 D・D' である。ここでは「人物」は、D 「名前なし」であり、D' 「細男・セ男・砥男」である。なお、D のテキストの箇所には「水を汲んでくれ言い合った」と書いてあることから、男は少なくとも複数人数でなければならない。つまり「名前なし」は、「男たち」である。だが、この「男たち」が誰であるかをテキストからは特定することができず、D の「男たち」が D' と一致していると断定することはできない。そこで、本稿では、D と D' の「人物」が一致していないものとみなし、これを前提とすることとする。それに対し、「状態」は双方とも「集まっている」であり一致している。以上より、D・D' は、述語的な因子が共通することによって要素対が構築されているので、述語的対応である¹⁹。

要素対 E・E' の場合、E と E' は双方とも、「人物」が「脂男」であり、「状態」が「犬に喰われて死ぬ」である。よって、「人物」と「状態」の両方が一致しており、かつ、対応関係にあると言えるので、E・E' は主語・述語的対応である。

要素対 F・F' では、F と F' とともに「人物」は「草男」である。また、「状態」は F 「風に飛ばされて死ぬ」と F' 「風に飛ばされ川に入り死ぬ」であるので、事実上、同じであると言える。したがって、「人物」・「状態」の双方が対応関係にあると言え、F・F' は主語・述

¹⁷本稿では「人物」が「主語的」、「状態」が「述語的」に相当するものとする。

¹⁸A の「人物」は「脂男・土男・草男・細男・セ男」であり A' の「人物」は「砥男」であるので、双方は「男」である点は一致している。しかし、本稿では、双方の個体が異なることから、「一致していない」ということにした。

¹⁹本稿では、D と D' における「人物」が一致しないことを前提に、かかる対応が述語的対応であることを述べた。一方、D と D' の「人物」が一致している可能性も排除することができない。仮に、「人物」が一致しているという前提に立てば、当該対応は主語・述語的対応であると言える。どちらの前提に立ったとしても、当該対応は主語的対応ではない。

語的対応である。

要素対 $G \cdot G'$ についてである。 G の「人物」は「土男」であり、「状態」は「川に落ちて死ぬ」である。対し、 G' の「人物」は「細男」であり、「状態」は「土男を助けようとして死ぬ」である。ここで、「人物」については、双方は一致していないので対応関係にないと言える。また、「状態」については、様態は異なるのだが、男が「死ぬ」という点において、双方は共通しているので対応関係にある。したがって、 $G \cdot G'$ は、述語的な因子が共通することにより要素対が形成されているので述語的対応である。なお、水汲みの話①に属する要素対はここまでである。以降の $H \cdot H' \sim K \cdot K'$ は、水汲みの話②に属する要素対である。

要素対 $H \cdot H'$ である。「人物」については H 「土男・細男・セ男」であり、 H' 「砥男」であるので、双方は一致しておらず対応関係にないと言える。逆に、「状態」については、 $H \cdot H'$ 双方が「暮らしている」であるので一致している。したがって、 $H \cdot H'$ は述語的対応である。

要素対 $I \cdot I'$ では、「人物」は「セ男」で一致しており対応関係にある。対し、「状態」については、 I 「他者と暮らしている」と I' 「セ男の死により他者との暮らしが解消される」であるので、双方のテーマが「暮らし」とあるという点は一致しているのだが、双方は、暮らしが「成立」した状態と「解消」した状態であるので正反対である。本稿の1節では、交差対句の対応の種類として、②「正反対」の要素による対応があることを紹介した。つまり、同じテーマであるが様態が「正反対」である場合も、対応の一種としてみなしている。かかる観点によれば、暮らしの「成立」と「解消」は、②「正反対」の要素による対応に相当しており、 $I \cdot I'$ の「状態」は対応関係にあると言える。したがって、要素対 $I \cdot I'$ は、「人物」と「状態」の双方が対応関係にあるので主語・述語的対応である²⁰。

要素対 $J \cdot J'$ についてである。ここでは「人物①」は J 「土男」と J' 「草男」であり、「人物②」は J 「土男」と J' 「脂男」である。つまり、「人物①」および「人物②」は対応していない。対し、「状態①」は J 「風をかき分ける」と J' 「風に飛ばされる」であり、「草」が外力を受ける点で共通している。また、「状態②」について、5.2節では、双方は「食事に関連するテーマとなるのだが、 J では男たちの食事を獲得するが、 J' では逆に男が犬の食事になっている」と述べた。つまり、当該箇所は②「正反対」の要素による対応である。以上より、要素対 $J \cdot J'$ は、「人物①」および「人物②」については対応関係ではなく、「状態①」および「状態②」が対応関係にあるので述語的対応である。

要素対 $K \cdot K'$ については、「人物①」は K 「細男」と K' 「細男」であり、「人物②」は K 「土男」と K' 「細男」である。また、「状態①」は K 「土男を探す」と K' 「土男を引っ張る」であり、「状態②」は K 「川に落ちて死ぬ」と K' 「スネを折って川に落ちて死ぬ」である。つまり、「人物」は「人物①」については一致しているが「人物②」については一致していない。また、「状態」は「状態①」と「状態②」双方が一致している。以上より、 $K \cdot K'$

²⁰ I の主語を「土男・細男・セ男」、 I' の主語を「セ男と砥男」とし、 $I \cdot I'$ 双方の述語を「暮らしている」とした場合、双方の主語部分が異なり、述語部分が一致するため、要素対 $I \cdot I'$ は述語的対応となる。

は「状態」に基づく対応であると言えるので、述語的対応である。

以上をまとめると次のようになる。なお、表中の「対応の判別」とは、主語的対応か、述語的対応か、主語・述語的対応かの判別のことである。

| 要素対 | 人物 | 状態 | 対応の判別 |
|------|----|----|----------|
| A・A´ | × | ○ | 述語的対応 |
| B・B´ | × | ○ | 述語的対応 |
| C・C´ | ○ | ○ | 主語・述語的対応 |
| D・D´ | × | ○ | 述語的対応 |
| E・E´ | ○ | ○ | 主語・述語的対応 |
| F・F´ | ○ | ○ | 主語・述語的対応 |
| G・G´ | × | ○ | 述語的対応 |
| H・H´ | × | ○ | 述語的対応 |
| I・I´ | ○ | ○ | 主語・述語的対応 |
| J・J´ | × | ○ | 述語的対応 |
| K・K´ | × | ○ | 述語的対応 |

以上の対応の判別を、テキストごとに整理すると次のようになる。

| テキスト | 主語的対応 | 述語的対応 | 主語・述語的対応 | 合計 |
|--------|-------|-------|----------|----|
| 水汲みの話① | 0 | 4 | 3 | 7 |
| 水汲みの話② | 0 | 3 | 1 | 4 |
| 合計 | 0 | 7 | 4 | 11 |

7. 結果および考察

水汲みの話①は、合計7組の要素対を持つ交差対句からなり、水汲みの話②は、合計4組の要素対を持つ交差対句からなることが、本稿の予備的検証において確認できた。そのうえで、かかる要素対が、主語的対応、述語的対応、主語・述語的対応のいずれに当てはめられるかの調査を行ったところ、まず、水汲みの話①と水汲みの話②の各要素対には、主語的対応に相当するものがないことがわかった。また、水汲みの話①の場合、述語的対応に相当する要素対が4組、主語・述語的対応に相当する要素対が3組あることが、水汲みの話②については、述語的対応が3組、主語・述語的対応が1組あることがわかった。なお、主語・述語的対応には述語的要素が含まれている訳であるから、本稿のテキストの場合は、すべての要素対が、述語的要素に基づいて構成されていると言え、交差対句の編成に対し、話者の心性においては、主語的論理よりも述語的論理がまさっていることを示唆している。

本稿の1節では、大喜多(2012a)において、便宜上、要素対を次の4種類に分類したことを述べた。

- ①「類似」した要素による対応
- ②「正反対」の要素による対応
- ③物理的変化どうしによる対応
- ④物理的変化の前後による対応

ただし、かかる4種類の分類には、以下のような課題がある。

例えば、①においては、はたして何が「類似」しているのか、が明らかではない。つまり、主語が類似しているのか、述語が類似しているのか、あるいは、主語と述語の双方が類似しているのかが明らかではない。この点は②も同様であり、②では何が「正反対」なのか、が明らかではない。仮に、主語が「類似」しており、述語が「正反対」の場合は、①と②の双方に分類できると言える。

また、③についても、「物理的変化」どうしとあるが、例えば、2節に引用した交差対句「老いたカラス」①の要素対 $A \cdot A'$ は、「質的な変化」どうしの対応であるとされている。確かに、 A には麴が酒になり、さらに糞へと質的に変化を遂げる様子が描かれており、これが、 A' における、木が燃えて火になり、さらに灰へと質的に変化を遂げる様子と対応している。しかし、厳密に言えば、当該「質的な変化」の概念には、何が変化をもたらしたのか（つまり主語）に対する言及がない。つまり、 A において麴→酒→糞へと変化させたのはカラスであると言え、 A' における木→火→灰への変化をもたらしたのは人間であると言えるので、これに基づけば、主語が明らかに異なっている。このような主語が異なる点については、「物理的変化どうし」という概念では表現できない。また、仮に、主語が同一で、かつ、「物理的変化どうし」が対応している場合、①と③の双方に分類できると言える。

④については、物理的変化の「前」と「後」の対応であるので、いわば、変化前後の状態どうしの対応であると言える。だが、やはり、当該分類法では誰がその状態にあるのか、については関知できない。つまり、仮に、変化前後で、主語要素と述語要素が一致していたとすれば、当該様子は①と④双方に分類できる。

以上より、かかる4つの対応の種類は相互に排他的であるとは言えない。かつ、①と②における抽象化水準は一致していると言えようが、①・②の抽象化水準は③・④とは異なっていると言える。

それに対し、本稿で示した、主語と述語の概念は相補の関係であり、かつ、主語的対応、述語的対応、主語・述語的対応における抽象化水準は一致している。したがって、かかる4種類の分類法に比べ、要素対の分析と整理を行う手法として有用であると言える。かつ、本分析法には、恣意性をより減少させる効果があると言える。筆者としては、今後、本稿での手法を他のテキストにも当てはめることにより、分析法としての有効性を検証したいと思っている。

なお、本稿のテキストでは、述語的対応と主語・述語的対応が見いだされ、主語的対応は見いだされなかった。つまり、交差対句の編成に対し、主語的論理よりも述語的論理がまさ

っていることが示唆された。アイヌ民族による他のテキストの場合も、同様に、主語的対応が見いだされないのか、また、かかる主語的論理以上に述語的論理を好む心性が、アイヌ民族に特異に見いだされるものなのか否かについては、今後検証を行うつもりである。

引用文献

- 大喜多 紀明 (2011) 「「アイヌ神謡」の修辞パターンから心意を辿る (上) — 「交差対句」を糸口として —」『西郊民俗』217号, 24-32. 西郊民俗談話会
- 大喜多 紀明 (2012a) 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」『アジア民族文化研究』11号, 181-213, アジア民族文化学会
- 大喜多 紀明 (2012b) 「パナンペ・ペナンペ民譚にみられる対称表現と調和 (上)」『西郊民俗』221号, 19-23, 西郊民俗談話会
- 大喜多 紀明 (2013a) 「アイヌの子守歌 (イヨルイカ) についての考察—心性が継承される直接的なプロセス」『京都民俗』30・31 合併号, 143-158, 京都民俗学会
- 大喜多 紀明 (2013b) 「山形県酒田市立光丘文庫に収蔵された「申渡」のアイヌ語日本語訳文に確認された交差対句について」『西郊民俗』225号, 18-23, 西郊民俗談話会
- 大喜多 紀明 (2013c) 「知里幸恵の『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカラにおける交差対句資料: アイヌ民族の修辞技法」『国語論集』10号, 104-126, 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室
- 大喜多 紀明 (2013d) 「上田トシを話者としたアイヌの散文説話「カラスに育てられた男の物語」についての考察: ストーリー展開と交差対句の対比」『ポリグロシヤ』25巻, 95-106, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明 (2014a) 「樺太アイヌの口承文芸における語りの構造: 浅井タケのトゥイタハ「カラスと娘」の場合」『知床博物館研究報告』36号, 69-78, 斜里町立知床博物館
- 大喜多 紀明 (2014b) 「2編の「ポヌンカヨ」物語にみられるストーリー展開と交差対句: 浅井タケを話者とする樺太アイヌ口承テキストを題材として」『ポリグロシヤ』26巻, 121-138, 立命館アジア太平洋研究センター
- 久野 誠 (2005) 「対照レトリックの可能性」『岐阜聖徳学園大学紀要. 外国語学部編』44号, 71-83, 岐阜聖徳学園大学
- 佐藤 知己 (2004) 「アイヌ文学における一人称体の問題」『北海道大学文学研究科紀要』112号, 171-185, 北海道大学文学研究科
- 丹菊 逸治 (2018) 『アイヌ叙景詩鑑賞 押韻法を中心に』北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- 津田 命子 (2004) 「アイヌ衣服と文様の変遷」『繊維製品消費科学』45巻12号, 893-898, 日本繊維製品消費科学会
- 中村 雄二郎 (1989) 『場所 (トポス)』弘文堂
- 村林 真夢 (2005) 「イメージにおける主語性と述語性」『京都大学大学院教育学研究科紀要』51号, 142-152, 京都大学大学院教育学研究科
- 藪中 剛司 (2009) 「蝟唐草文様のトゥキ (杯) について」『北大植物園研究紀要』9巻, 1-9, 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

執筆者紹介

氏名：大喜多紀明

所属：自由が丘産能短期大学能率科 2 年次

Email：ohkitan@yahoo.co.jp